

終章 新たな文明を求めて

(1) 迫りくる危機と文明

レスター・ヴァウンによる『飢餓の世紀』は一九九五年であったが、二〇一二年、まさしく現実化の様相を見せはじめてきている。

世界が今後、食糧増産が困難なことは農業技術の不在や漁場と放草地の限界、更に農地の減少、なによりも水不足、おそらく中国における水不足が世界の食糧安全保障を揺るがす事態を指摘しておかなければならない。

一方一九五〇～一九九〇年の四〇年間は史上空前の人口増、年平均七千万人増で約二八億人であった。今後予想される一九九〇～二〇三〇年の四〇年間は年平均九千万人増で三六億人増、現在はずでに七〇億人に達している。

アメリカ流の食生活や「肥満」の解消、人口増加を抑制するための家族計画、先進国の援助の増額等が指摘されていても限界に近い。ローマクラブ「成長の限界」(一九七二年)の時点でも地球の人口増、どんな技術が発展しても、二一世紀後半には人類の大量死を予測している。温暖化、正確には異常気象であるが、究極の「環境問題」はおそらく「飢餓」と「肥満」であろう。また現代の「黒死病」エイズのアフリカ諸国への拡大も深刻な事態である。

近代文明の終焉としての三大大量死、そして過渡期の対応を指摘してきたが、文字どおりより現実化、深刻化が迫ってきたのである。トインビーを引くまでもなく、あらゆる文明は外からの攻撃ではなく、内部からの崩壊によって破壊するのである。

その意味では、ポスト冷戦の引き金だった「11・9」（一九八九年一月九日のベルリンの壁崩壊）以前からの世界の動向に注目すべきである。近代文明、科学技術時代での民族や人種の復権とも云える紛争や再び「宗教」の大きな声を注視しなければならなかった。「歴史の逆襲」などの事態ではなく、ましてや「歴史の終り」などのたわ言や世界の「グローバリズム」などの現実ではまったくなかったわけである。

それ故、「9・11」（二〇〇一年九月一日）は「文明の衝突」ではなく、近代文明の象徴としてのエセ・グローバリズムの崩壊の第一歩であった。アフガン、イラク戦争を経由して二〇〇八年のリーマンショック、EUが引き金のソブリン危機へとつながり、今日の深刻な事態を引き起こしている。

二〇一〇年、すでにG8からG20の時代へ、そしてアラブの春、アフリカの秋、EUのたそがれ、ロシアの冬と続き大中華圏やインドのシーズンへ。しかし忘れてならないのは、アフリカの飢えとエイズは更に深刻に、中東の紛争状態、そして多くの矛盾を含みながらもアジアを中心とするダイナミズムである。アジア太平洋、アジアユーラシア、アジアオセアニア、アジアアフリカの動向である。

地球環境の周期的変動は別として、人為的に引き起こされた異常気象や自然のリサイクルを無視した開発と云う名の自然破壊、自然災害。自然にとっては変動であって、災害などと云うのは人間だけの事ではあるが、この一連の現実を直視しなければならない。

人間中心主義の開発や営み、人間の勝手な行動や原理自体が、自然、地球、つまり「環境」の限界を超えてしまったと云ってよい。もっとも尊いとされる基本的な人権も民主主義も、今や宗教化された資本主義は云うまでもなく、科学技術も、神さえも批判されなければならず、否定されなければならない事態なのかもしれない。近代文明の崩壊は、従来のように将来や未来の文明に受け継がれるのではなく、もはや「人間」の生存そのものが問われているのではないだろうか。「地球にやさしく」とか「動植物との共生や共存」などと云った次元ははるかに超えているのかもしれない。

地球温暖化は人類の危機

地球温暖化は、新興途上国の急速な経済成長によって加速されつつある。「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」は、温暖化の進行に伴い陸域生態系はCO₂を吸収する側から放出側へ転化するとしている。その温度は二℃程度の上昇で始まる。

世界のCO₂排出量は、吸収量の二倍以上であるとのIPCCの資料をもとに、大気中のCO₂濃度を安定させる「排出と吸収のバランス」を取り戻すことをまず達成しなくてはならない。

人類約七〇億人が二〇五〇年に約九〇億人へと増加し、経済発展を目指して化石燃料、資源を消費し、かつて現在約三三億人の都市人口が二〇五〇年には全人口の約六割になると予測され、農業生産などに従事する地方人口は減少に転じる。

すでに地球温暖化による異常気象で、食糧生産にも影響が出ており、エネルギー・資源価格の上昇に加えて、

食料品の価格も高騰するなど生活者の家計を直撃している。

地球温暖化は、経済・産業社会・国民生活へ甚大な影響を及ぼすものである。これは産業革命以降の文明を、地球の正常な炭素循環機能が破滅する前に作り直す作業なのである。低炭素・循環型共生社会へ移行することは、結果として原油価格の高騰、資源枯渇による経済社会への打撃を緩和し対応することにつながる。

文明の災禍

東北、北関東一带をおそった地震、津波、原発事故の「巨大複合災害」は日本と社会の実相をさらすと共に、「原発安全」や日本の科学技術信仰を崩壊させ、「自然の災禍」と同時に「文明の災禍」をも痛感させた。

自然の災禍と書いた。自然の恵み、いや人間を含む動植物が自然によって生かされていることから始めなければならぬ。地震や噴火の多い地域だからこそ豊かで、太古からの洪水の歴史が肥沃な平原をつくりだした。海は津波によって海底の沈殿物が一掃されて海の生態系はより豊かになる。生態系はときどき攪乱されないと衰弱していくとか。自然の営みであり、日本列島そのものが云わば自然の災禍によって形成された。しかし、自然から遠ざかってしまった我々には、津波や地震は災禍以外のなにもでもなかったのである。

「供養―死者と向き合う」と記す文章を、紹介しよう。以下、内山節著『文明の災禍』（新潮新書、二〇一一年）

「原発という人間がつくりだした人工物の事故は、魂の諒解という世界まで破壊してしまったのである。…原発事故によって、生と死が同居し、生と死が明確な規則性をもたずに交錯する世界が現出したというこ

とである。：私たちは生と死を同次元で考えなければならなくなった。しかも世代を超えたつながりをふくめてである。

そのことは生と死の共時性の回復を求めているのである。生と死が別の次元の事ではなく、同じ時間世界のなかに存在する、ということの確認を、である。

おそらく今回の大災害からの復旧や復興は、生と死の共時性の回復からしかはじまらないだろう。……
出発点は魂の祈りなのだとは私は思う。」

日本の古来からの世界では、人々が亡くなった時には、命を失った自然の動植物を含めて死者を弔うことによってはじめをつけてきた。自分たちの世界は自然と人間によって、生者と死者によってつくられていると感じていたからである。死者は消え去った人ではなく自分たちと共にあると考えられてきた。村の暮らしは先祖と共にあると云ってよい。

それ故、供養は共同体があってこそ真価を発揮するのである。

しかし日本の多くの人々は、共同体を失った事により、まさに「死を、とりわけ不慮の死を不条理のなかに見るしかなくなった」のである。

文明の発展、経済の拡大はシステムの複雑・巨大化をもたらし、リスクの実態が伝わりにくい「原発」的なものが充満した。巨大システムの迷路の前では「情報」などまるで無力でしかなかった。むしろ「情報操作」の恐ろしさを痛感させられた。

「低濃度の放射能汚染の場合、危険性を誰も判断できない。数十年後に具合が悪くなったとしても、もう

何が原因か分からない。近代社会では人々は明確な判断力をもっているから、情報を公開すれば正しく判断できると考えられていました。だが、それは楽観論に過ぎなかった。」(内山節インタビュー記事・毎日新聞、二〇一二年七月六日)

環境破壊と人口爆発による地球規模での文明崩壊については『文明崩壊滅亡と存続の命運を分けるもの』の著者ジャレド・ダイアモンドは語る。

環境破壊や人口爆発は現代だけの問題ではないとして、人類が狩猟技術を開花された五万年前から古代マヤ文明、そして最近のルワンダやソマリアの事例を引いて展開している。

現代文明にとって最も脅威のこの問題に関しては、一二に分類できるとしている。自然破壊、漁業資源の枯渇、種の多様性喪失、土壌侵食、化石燃料の枯渇、水不足、光合成で得られるエネルギーの限界、化学物質汚染、外来種の被害、地球温暖化、人口増、一人あたり消費エネルギーの増加である。そのひとつでも対策に失敗すれば、五〇年以内に現代の文明全体が崩壊の危機に陥ると警告している。更に、今後開発される技術も、予期せぬ問題を引き起こすと懸念すらしている。

しかし同氏のインタビュー記事『文明崩壊への警告』(朝日新聞、二〇一二年一月三日)で、福島原発事故について「リスクが過大評価されがちな事故」としている点が大きな疑問である。

また、放射能は人間の遺伝子を傷つけ、子どもたちへの影響が心配。放射能廃棄物は一〇万年以上もの間、危険な放射線を出し続けているとの問いに対して、「一酸化炭素による地球温暖化はすでに大きな被害をもたらすサイクロンなどの熱帯低気圧を増しています。放射性廃棄物は地下深くまで封じ込められますが、放出さ